



# 京都 YWCA

# 3 2017

YWCAは、キリスト教を基盤に、世界中の女性が言語や文化の壁を越えて力を合わせ、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現する国際NGOです。

## 一多文化理解プログラム「イスラムにふれよう」シリーズ アフガニスタンの孤児支援活動を通して伝えたいこと



京都 YWCA 国際委員会の「イスラムにふれよう」シリーズ第三弾として、1月14日に柄子眞弓（からこ まゆみ）さんをお迎えし、アフガニスタンでの孤児支援についてお聴きました。

### 孤児支援団体「ラーラ会」の設立

柄子さんは2002年にボランティアとして初めてアフガニスタンを訪れました。翌年孤児たちの悲惨な状態に「見た者の責任」を果たすべく支援活動を開始、賛同者12人でラーラ会を設立されました。「ラーラ」とはダリ語（アフガニスタンの公用語の一つ）でチューリップのことで、アフガニスタンの国花でもあり、平和への希望のシンボルとして名付けられたそうです。



お話される柄子眞弓さん

まずはヘラート州にある最も悲惨な状況にあった州立孤児院の男児250名に日本で集めた寄付で靴やセーターを送り、初体験のピクニックを一緒に楽しんだり、栄養あるランチの提供などもしました。2006年には家庭的な温もりのある孤児院を建設し寄贈されました。活動開始当時は現地の人々との信頼関係もなく、金銭的な支援が確実に子どもたちのために使われるのか信用できない状況だったそうですが、何度も訪問し支援を続けることで関係ができていったそうです。孤児院設立や物品援助だけではなく、子どもたちが多岐にわたる情報を公正に判断するために必要となる英語やパソコンのための教室を孤児院内に開設し、将来の自立や生活向上のための支援をされました。

### 一番大切なのは「教育」

ラーラ会の会員は約500名に増えましたが、今はあまりに危険で現地に行くことはできません。孤児院への活動は休止し、現在は将来アフガニスタンを支えていく女子大学生への「ラーラ女子奨学金」の支給を行っており、これまで約20名の大学生を支援してきました。

柄子さんは「教育」が一番大切と言われます。同時に私たち日本人が興味を持ち知ろうとすることが大切だということです。「どうしてアフガニスタンの支援をしようと決めたのか」という質問に「アンテナを張って興味を持ち続けければ不思議と情報は入ってきます。ピンとくるもの、インスピレーションを大切にしています」と言われました。

京都 YWCA の日本語教室「洛楽」の生徒でラーラ会が支援しているレザさんは、昨年の「イスラムにふれよう」シリーズで「アフガニスタンに起こった不幸な状況の原因は、決してイスラム教ではない、人が問題なのです」と言われました。イスラム教は本来男女平等や平和を望む宗教であるのに、少数の原理主義者の解釈で誤った方向に向かい、教育が不十分な人々はそれに安易に誘導されて行動し、その誤った行動が今も多くの人々、特に女性を苦しめています。

このシリーズでの講演会やイスラム寺院訪問を通して、この情報社会にいても知らないことはたくさんあることを知りました。私たち一人ひとりがアフガニスタンの現状に関心を持ち続け、情報を共有し、伝えていくことが大切です。そのことが今後の活動での私の目標となったことを確信し、継続して支援に携わっていきたいと思いました。

(小栗弘美)

## 京都 YWCA 平和委員会「カフェ・フリーデン」——沖縄報告会 「今沖縄で何が起きているか」

昨年からは沖縄では、東村高江でのヘリパッド強行建設や「辺野古違法確認訴訟」など米軍基地の強化を推進する政府によってさまざまな形の暴力が吹き荒れている。

本土のマスメディアはこのような暴力に無関心を決め込み、ネット上では基地に反対する人々を「プロ市民」などと侮蔑する言説が飛び交う。基地問題については「聞きづらい」「話しづらい」という空気が漂う中、4人の京都YWCA会員が、昨年10月から12月にかけてそれぞれ沖縄を訪れた。高江、辺野古の現場にも行き、機動隊や右翼の街宣車に阻まれながらも粘り強く座り込みを続ける人たちに出会い、その不屈の精神に励まされ、ここで起きていることを京都でも伝えようと話し合った。

1月26日の沖縄報告会では、まずDVD『いのちの森高江』を見ながら、1996年日米SACO合意（沖縄に関する特別行動委員会）で北部訓練場の一部を返還する代わりに、ヘリパッドを高江に建設する取り決めがなされたが、実際は「基地の整理縮小」ではなく「負担増加」であった経緯をたどった。また「安全保障と沖縄」についての講演会や辺野古の浜で行われた

ピアノコンサートの様子も報告された。

昨年10月末に開催された「世界のウチナーンチュ大会」では、海外に移民したウチナーンチュ（沖縄人）が世界中から6000人以上



集まり、ウチナーのパワーと結束の強さを内外に広く伝えた。例えば、南米ボリビアのオキナワ村は、戦後、米軍に土地を接収され、家や農地を失った人たちの社会不安を抑え込むために、アメリカ統治下の琉球政府が移民政策として始めた移住地だ。

一人ひとりのかけがえのない日常が、巨大な力を持つ国の政策で簡単に切り捨てられ分断させられてきた歴史は、60年以上経った今も沖縄では変わらず続いている。平和を希求する草の根の人々が、基地問題を自分のこととしてとらえ、国や地域を越えて沖縄とつながっていくことができれば、これまでとは違う新しい道が拓けると、願い信じている。

（下村泰子）

### シリーズ 若者からの発信 ⑤

シリーズ「若者からの発信」第5回目は、大学で国際関係学を学び、日本YWCA主催「ひろしまを考える旅」や「南京を考える旅」に参加した経験を持つ奥山りつさんから寄稿いただきました。

#### 情報と現地訪問の間を埋めるもの ～史実への「想像力」について～

本、テレビ、インターネットなど、今の時代の情報を得ようと思ったら、いろいろな媒体から集めることができます。「海外の有名な遺跡が見たい!」と思ったら、グーグルのストリートビューを開けばイギリスの大英博物館からカンボジアのアンコールワットまで見放題です。では、実際に現地に赴いて見学したり、話を伺ったりすることに何の必要性があるのでしょうか。

「ひろしまを考える旅」や「南京を考える旅」に参加する中で、なぜわざわざ足を運んで自分はここに来たのかと自問自答しました。例えば、現地に足を運ぶ前に情報を収集し、南京大虐殺でどの程度の犠牲者がいたのかについて知ったとします。頭に数はインプットされていても、「そんなことがあったのか」という程度の印象しか持てず、どこか冷たい印象を受け他人事のように思うことが多いのではないのでしょうか。数を発信する側は恐らくそこに気持ちを込めているのですが、受信する側には単なる記号でしかなくなっていることもしばしばあります。しかし、実際に訪れてみると、一緒に回るメンバーから当時を生きた

親戚の話を聞いたり、遺留品を見たりする中で、五感をフルに活用し、徐々にその当手を鮮やかに想像することができるようになっていくのです。単なる記号でしかなかった犠牲者が、一人ひとりの人間として自分の頭に浮かんできて、そこに生活が営まれ、人生があったのだと初めて“理解”できたような気がしました。

この「情報」と「現地訪問」の間にあったのは「想像力」ではないのでしょうか。私は現地に行って初めて理解できたと感じましたが、笑いながら原爆資料館を回る人はいますし、情報を得るだけで当手を想像することができる人もいます。ただ、想像力がなければ、数は単なる記号ですし、場所は単なる空間でしかありません。もし現地を実際に訪れることができるのであれば、五感と想像力を駆使し、もし訪れるのが難しければ、情報を目にした際に想像力を生かして“理解”しようとしてみてはいかがでしょうか。

（奥山りつ）

## 2.11 集会「戦争死者のゆくえ」を考える

前日から雪模様の2月11日、京都YWCA2.11集会が「戦争死者のゆくえ」と題して催された。発題者は一般企業で働きながら大学院で研究を続ける片岡英子さん。彼女は京都YWCA平和委員会の若きメンバーでもある。

集会は、4～5人の小グループに分かれて意見を述べ合う形で進められた。私たち参加者が「戦争死者のゆくえ」という言葉から最も連想したのは、戦争による死者の遺族の弔いであった。そしてそこから、戦争死者を祀(まつ)り称える靖国神社についてや、自衛隊が派遣されている南スーダンで近い将来出るかもしれない死者を、国家や世の中がどう弔うだろうかという話に広がった。

グループでの意見交換やその時々片岡さんの説明に耳を傾けながら、知ったことがあった。それは、戦没者遺族の中には「親族の死は無意味なものではなく、国のために身を捧げた英霊である」という靖国神社の考え方を心の支えにしている方々がいるということだ。しかしまた一方では、遺族が求める気持ちは知りつつも、「彼らの死は英霊的な死ではない」という「反ヤスクニ」の声が戦後あり続けてきた。

このような戦後日本の流れを認識しながら、私たちは「も

し…」と近い将来起こりうることを考えてみた。もし戦争死者が出たら、その遺族の心はどこに行きたくらう。世間は、その死を「我々のために戦ってくれた」という「正義のための死」だととらえるかもしれない。私たちは、遺族や世間の心を「私たちはかけがえない命をおめおめと死なせてしまったんだ」という思いや、反戦の行動に引き寄せることができるのだろうか。

「戦争死者のゆくえ」を考えると、国家や世間が戦争死者をどのようにとらえているのか、敏感でありたいと思う。そして、そのゆくえを見つめることが、国家の仕業を見逃さず、戦争死者を出さないためのひとつの方法であることに気付かされた集会であった。

(安永雅代)



グループで話し合う参加者

### 自立援助ホーム「カルーナ」新年会 2017 「着物」も「恋ダンス」も楽しみました！

1月7日(土)にカルーナの新年会を実施しました。現在の利用者は6人ですが、アルバイトや用事のため利用者の参加は3人でした。3人は、食事会の前に着物を着せてもらいました。「きれいやね」と声をかけてもらい、中庭で記念撮影をして町内を一回り。いつもと違う自分の姿に満足していました。

続いて食事会では、カルーナ運営委員会のメンバーや、ボランティア、スタッフも参加しました。手作りの料理やリクエストのピザ、お持たせのケーキなどおいしいものがたくさん並びました。自己紹介の時間では、名前の漢字当てクイズをしたり、年頭の抱負を一人ずつ話したりしました。高校再入学を目指す人、仕事を休まない決意する人、3人それぞれが自分の目標を披露しました。

利用者2人の「恋ダンス」も披露されました。昨年ブレイクしたダンスを新年会のために練習し、その成果がバッチリ出て、拍手をもらいました。そのあとカードゲームUNOで遊び、夜遅くまでにぎやかな時間が続きました。

(横川宏美)

### 多世代・多文化で楽しんだ 「ほっこりおぜんざいの会」

京都YWCAの会員やボランティアやYWCAの会館に住む人たちが出会い交流する機会を作ろうと、1月21日(土)「ほっこりおぜんざいの会」を開きました。



会員のお一人が、時間をかけ材料にもこだわったおぜんざいと甘酒を作ってくださいました。参加したのは、会員やボランティア、高齢者住宅「サラーム」に住む方たちや、内閣府の青年国際交流事業で京都に来たフィジーとコスタリカの青年3人です。この3人はホームステイ先として彼らを受け入れていた会員と共に参加されました。

おぜんざいや甘酒をいただきながらお喋りに花が咲き、お腹が満足したところで、青年たちが日本のこま回しやけん玉にチャレンジしました。すぐにはうまくいきませんが、3人とも熱心に何度も挑戦し、成功すると笑顔がはじけ、見ている私たちの中からも歓声が上がりました。

おいしい食べ物に笑顔も加わって、楽しいひとときを過ごすことができました。

(安藤いづみ)

今後のプログラム

エコ・ド・Y コーラスライブ

■日 時：2017年3月7日(火) 14:00～15:30  
 ■場 所：京都YWCA ホール  
 ■入場料：無料

えいごであそぼう「御所へピクニックに行こう！」

■日 時：2017年3月18日(土) 10:30～12:30  
 ■場 所：京都YWCA  
 ■参加費：1,000円/人  
 ■対象年齢：5歳～小学生  
 ■持ち物：お茶・帽子・タオル  
 ■申込み：要  
 ■主 催：京都YWCA 生涯教育事業部

端山梨奈 スプリングコンサート

■日 時：2017年3月26日(日) 14:00～16:00(開場13:30)  
 ■参加費：2,500円(お茶菓子付)  
 ■場 所：京都YWCA ホール  
 ■曲 目：\*日本の抒情歌

\*「マイ・フェア・レディ」より「踊りあかそう」  
 \*「ジャンニ・スキッキ」より「私の大好きなお父さん」  
 \*タイム・トゥ・セイ・グッバイ ほか  
 ■出 演：ソプラノ 端山 梨奈(はやまりな)、  
 ピアニスト 山口 聖代(やまぐちまさよ)

■申込み：要  
 ■主 催：京都YWCA チャリティイベント企画委員会

春休みキッズデイアウト in ガジュマルの樹

■日 時：2017年3月27日(月)・28日(火)・29日(水)・30日(木) それぞれ10:00～17:00  
 ■内 容：お友達とお出かけしたり、クッキングしたり、いろんな国や地域のことについて考えたり・・・春休みの宿題もやります！  
 スケジュールの詳細や持ち物などは後日お知らせします。  
 ■参加費：全4日参加 8,500円 1回参加 2,300円  
 兄弟・姉妹割引あり(2人目から25%引き)  
 ■対 象：小学1～6年生  
 ■定 員：各日20名 ※先着順  
 ■申 込：要  
 ■主 催：京都YWCA ガジュマルの樹運営委員会

ご寄付ありがとうございました。

2016年12月1日から2017年1月31日  
 寄付者一覧(敬称略、順不同)

一般寄付

寺田有古、今村武廣、中川美佳子、松永公子、今井貴美江、筒井奈都子、中村美智子、マーサ・メンセンディーク、弘中奈都子、平野富希、吉川文一、清水義、竹森洋子、下村泰子、文田則子、永井靖二、出店都、丹波卯子、石丸千里、山崎美和子、伊庭和子、山本知恵、井上依子、匿名1名、(株)田中工務店、(公財)京都YMCA、(社福)西陣会、日本キリスト教団京都御幸町教会、日本キリスト教団京都丸太町教会

各指定寄付

\*多世代多文化ふれあいコミュニティづくりのための改修募金  
 野田恵津、上村飯巳子、篠田茜、上内鏡子、有田孝子

\*メンテナンス募金  
 木戸さやか

\*福島プロジェクト  
 弘中奈都子、木戸さやか、日本キリスト教団室町教会 オリーブの会、京都東山教会、クリスマスバザー実行委員会、クリスマス集会参加者席上献金

\*親・子育て支援委員会  
 大島溥子、吉谷節子、親子ライブラリー有志

\*APT  
 上原従正、土田エメリータ、西原美那子、大島溥子、大畑京子、菅原充子、東山正明、金光朋充、青木信雄、宇山進、石井ゆき、近野玲子、青木理恵子、土橋淳子、上村飯巳子、飯田奈美子、仲本直子、森田園子、永井靖二、上内英子、杉山知子、上内鏡子、木戸さやか、青木信雄、勝西伸之、張善花、井上依子、京都ノートルダム教育修道女会、京都・東九条 CAN フォーラム、平安女学院中学・高等学校宗教センター、日本キリスト教団京都上賀茂教会、同志社中学校

\*国際委員会  
 小寺敬子、宮武美知子、近野玲子(にほんご教室洛楽へ)

\*平和委員会  
 大島溥子、宮武美知子、イエニックふたみ、日本キリスト教団室町教会 オリーブの会、平和委員会有志

\*うららかふえ運営委員会  
 竹濱タミ、田中秋桜花、森本瑞希、生実良子、小寺敬子、御前明美、宮武美知子

\*子どもの居場所「ガジュマルの樹」

大島溥子、小泉小枝、宮武美知子、安藤いづみ

\*自立援助ホーム「カルーナ」(寄付、後援会費)

上村京子、井上悦子、斉藤洋子、安達みち代、宮武美知子、西森頼子、手島千景、吉川文一、大槻裕樹、西文子、吉岡恵津子、竹之下雅代、岩井一枝、山上義人、木戸さやか、小寺敬子、匿名1名、日本聖公会福井聖三一幼稚園、京都府更生保護女性連盟、日本福音ルーテル本郷教会、日本キリスト教団京都上賀茂教会、日本聖公会聖アグネス教会、日本キリスト教団京都地区京都南部地区、日本キリスト教団京都丸太町教会

\*自立援助ホーム「カルーナ」教育奨励金

有田佳子、亀田和代、吉村佳代子、斉藤洋子、谷本よし子、北井輝美、眞下正己、富田恵津子、西文子、井上摩耶子、西谷鎮子、開敷理恵、匿名2名

\*賛助費

辻野茂子、岡昭男、佐野千枝子、内田邦子、出店都、窪田左知己、高市和久



PÂTISSERIE  
 AU GRENIER D'OR

Maison fondée en 2001

KYOTO

仏蘭西菓子処

お菓子教室

パティスリー/サロンド・テ  
 オ・グルニエ・ドール

Open/11:00a.m ~ 7:30p.m

定休日/毎週水曜日、火曜日・木曜日(不定休)

京都市中京区堺町通錦小路上ル 527-1  
 Phone 075-213-7782 Fax 075-213-7783

1・2月/理事会報告

- 大阪YWCAにて開催の三市YWCA(京都・大阪・神戸)交流会に参加した(1/14)。
- 会員活動委員会の再編(現委員会を課題別に整理)について協議。
- 2016年度年度末見込みと2017年度の予算を審議。
- 会館設備の保守費用に関する「メンテナンス募金」開始。
- 持続可能な財政確立と会員・会友・賛助員を増やすための方向性を協議。
- 国交省補助事業受託会社スマートウェルネスのヒアリング調査を受けた(2/10)。
- 公開講座「宗教から現代を考える～宗教儀礼の現代的意味」関西セミナーハウスと共催(2/25)。

KYOTO YWCA No.537

2017年3月号(3月1日発行)

発行人 上村飯巳子  
 発行所 公益財団法人京都YWCA  
 京都市上京区室町通水上ル  
 電話 (075)431-0351 FAX (075)431-0352  
 e-mail office@kyoto.ywca.or.jp  
 URL http://kyoto.ywca.or.jp  
 郵便振替 01080-9-1566  
 口座名義 (公財)京都YWCA  
 定 価 50円